

大垣の思い出

ソニーを退職し、一九百九十六年から五年間、太平洋精工株式会社に勤務する事になった夫と共に、岐阜県大垣市に住むことになった。

大谷川の手前、東に夫の第二の職場があつた。そこよりさらに東に我が家がある。ある日「俳句絵手紙展」の案内状が届いていたので、富田ユーターテーに行ってみた。

俳句を詠んだり、絵手紙をみたりした。「ジャガイモの花を見て何もなき日かな」という句に私はとても感動した。

北村征子さん、松野千枝子さん、高木ゆき枝さんと私が意気投合した。皆で俳句を勉強したいと話していたら、たまたま、作家の佐藤をさむ先生もいらしたので指導をおねがいして句会をやることになった。先生も大垣で俳句を教えたいと思っていたそうで、かたかご句会という名をつけてスタートすることになった。

夫の転勤で、敦子はやがてアメリカへ行く予定だったので、

富田ユーターテリターのオーナーの澄江さんに、私の代わりに句会に入ってくださいらないかとお願いした。「実は私もやりかっただのよ」とのことですんなりまとまった。

私もアメリカから投句した。一ドルの春の健診済みにけりその後、佐藤をさむ先生の岐阜句会と合流し、鶴句会の岐阜支部となり、澄江さんは事務局を引き受けて現在も活躍中である。

ゆき枝さんは、醒井地藏川の梅花藻を見ましようとして連れて行ってくれた。関ヶ原の戦で家康が坐った石のところまで休んでから、関ヶ原のお宅までつれて行ってくださり、裏の立派な栗林を見せてくださった。

ゆき枝さん、千枝子さん、澄江さんと敦子は有馬温泉に行ったり、神戸の街で遊んだ。

敦子が横浜に戻った後も、四人で湯河原温泉に来てモア美術館に行ったりした。

ゆき枝さんは妹さんと遊びに来くれた。彼女は私達の中で一番若かったのに病でなくなってしまった。合掌。

長女夫婦が遊びに来たので、長良川の鵜飼を見学のため、鵜匠の宿、杉山さんを予約した。料理もおいしかったし、お風呂も快適であった。舟からまじかに見る鵜匠と鵜の意気伝は迫力があつた。「おもしろうてやがて哀しき鵜飼かな」をまさに体感した夜となった。

仕事の都合によりアメリカから帰国し木戸町に住むことになった。

ある日、隣室のヤングママをランチに招いた。彼女はコロコロと太った男の赤ちゃんを抱いてきた。じつは前日に、ゆき枝さんと千枝子さんが来てくれて、簡単なローストビーフをたくさん作っておいたのでちようどよかった。肉に塩胡椒してフライパンで表面を焼き付け、回しながら焼いて赤ワイ

ンとウスターソースと醤油を加えてソースとする、火力は中火、そこで蓋をし弱火にして五分間蒸らす。その間に付け合わせの野菜のせん切りを作っておく。蓋を取り、肉を出して薄切りにする。お皿に肉を真ん中に円く盛り付け周りに野菜を彩りよく盛る。これに美味しいパンと紅茶があれば立派なランチとなる。野菜はセロリ、大根、人参、など。

夏、伊吹山のお花畑を見に行つた。麓にポツンと蕎麦屋があつた。傍に蕎麦の花畑があつた。おろしそばが美味しかった。

週末はよく京都へ遊びに出かけた。関ヶ原を抜けると琵琶湖にぶつかる。左折してしばらく走ると滋賀県大津市に出る。琵琶湖大橋を渡って京都へ向かう。峠を越えて大原の里に出る。しば漬け本舗に入った。ちょうど昼時なので漬物定食を注文して、それが美味しくて、おいしいねと言いながら窓外に目を移すと赤紫蘇畑が美しい。

三千院に向かった。紅葉は幻想的で素晴らしかった。

別の日宇治の平等院の庭を歩いていると学生らしきカップルと一緒にあった。男の子が「大人になってから、ゆつくり来るのもいいね」と話していた。私たちは何も言わずただアイコンタクトでほほえんだ。

スポーツジムに通いだして、片道二キロ歩いて二キロ泳いだ後ポカリスエットを飲んで帰るように言われた。腎臓が悪いのに不注意で飲んでしまった。家に帰ってから腹痛と下痢で苦しんだので、夫は私をおぶって階段を下りて車で病院へ連れて行ってくれた。先生は痛風かもしれないが、腎臓からきているのかもしれない様子を見ましようとのこと、安静にして休んでいた。治ったような気がしてきたので「大丈夫よね、まだ自己治癒力があるのね」、と自己肯定をしてみました。

横浜へ帰ってから腎臓病が悪化し人工透析の生活となった。

二〇一四年十一月三十日脳出血で倒れ、右半身麻痺の為に車椅子の生活となり、いつも夫のサポートが必要である。

二〇十五年九月一日、佐藤をさむ先生と澄江さんは私のために、大垣と横浜の中間、有松鳴海の公民館で特別な吟行句会を考えてくださった。岐阜支部の皆さんが参加してくれた。千句塚公園にて芭蕉の千鳥句碑を見てから、請願寺の芭蕉堂を見学した。敦子は前夜有松の手前の知立のホテルで朝、千鳥が飛ぶのを見たので感激もひとしおであった。この石碑の芭蕉翁の句「星崎の闇を聴けと啼く千鳥」は、現存する唯一の自筆の翁塚であるという。

大垣での出会いや経験は私の心の支えとなっている。
皆さんありがとう。

平成三十年二月 鈴木 敦子